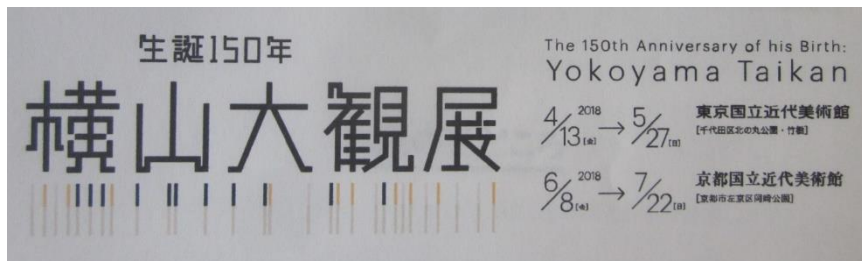


生誕 150 年 横山大観展

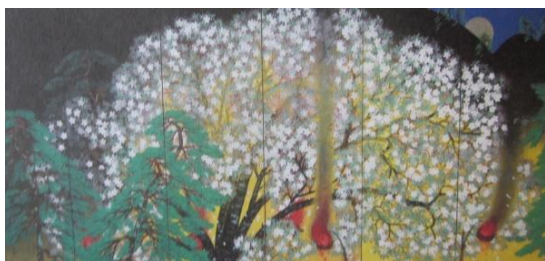
東京国立近代美術館 2018. 04. 13～05. 27 京都国立近代美術館 2018. 06. 08～07. 22



「横山大観」(1868～1958)は、「岡倉天心」とともに新たな絵画を探究した画家で、その生誕150年を記念した「大規模回顧展」が、100年ぶりに発見された作品も出品されて一同に集う企画として東京および京都会場での開催である。

画伯は、近代日本画の巨匠として今なお幅広い人気を誇り、本展覧会は西洋化が進みつつあった当時において、日本画家の伝統技法を継承して、従来の型に限定されない自在な画風を描いた巨匠「大観」の画業を回顧する企画である。

展覧会の構成は、明治・大正・昭和の時系列に沿ったもので、40m超の「日本一長い画卷」として知られる重要文化財《生々流転》の一举公開や、かがり火に夜桜が浮かび上がる《夜桜》と鮮明な赤とプラチナがまばゆい《紅葉》の同時展示など、まさに「大観」の代表作が揃う展示がされて注目されている。



《夜桜》 紙本彩色 1929年 両会場とも期限限定展示 写真左

六曲一双の屏風に描かれた作品は、黒々とした連なる山を背景に、左隻の山桜は満開、淡い緑の葉と薄紅色花びらが燃えさかる篝火に浮かび上がり、しつとりとした装飾的畫面に仕上げられて「やまと絵」の名残を感じさせる。

《紅葉》 紙本彩色 1931年 両会場とも期限限定展示 写真右 六曲一双

秋の溪谷を彩る楓の大木、ひしめく紅葉は赤・黄・茶と色調を変えて水面に静かな波が立つ。色彩の対比や同じ意匠の反復による装飾効果が認められる。

《生々流転(せいせいりてん)》 絹本墨絵 1923年 重要文化財 東京会場

水墨画の集大成は40mを超える超巨編で、“山間の雲から生まれた水滴が地に落ちて川から海となり、更に瀧の踊る海から再び雲として天に戻る「水の一生」が描かれた作品”で、画伯の水墨技法が注ぎ込まれた壮大さを堪能できる。